

## 国際的視点での日本の河川の変遷の俯瞰的整理と相対化

東京大学大学院総合文化研究科正会員 清野聡子

(財)リバーフロント整備センター 正会員 佐合純造・○土門晋

(株)建設技術研究所 中島満香

**内容：** 「日本の河川は国際的には、どのように、どのくらい知られているのか?」。国際協力や学会の場では、日本の河川関係は重要な役割を果たしていると考えられる。しかし、日本列島の川の見学や観光を目的に訪れる外国人が多いという実感はない。また、国際的に有名な日本の川も想起できない。すると、日本発の情報や技術援助は、日本列島の自然条件のイメージが希薄で、その開発された背景が十分知られていないまま行われている可能性がある。本研究では、2006年3月に開催された第4回世界水フォーラム「水のエキスポ」展示会場における「日本の河川の自然再生」という実際的な事例をもとに、日本の河川の変遷の俯瞰的整理を行い、国際的発信を前提としてはじめて相対化できる日本の特性を考えた。そのような視点は、国際発信だけでなく、現在の日本の河川をめぐる技術・学術・政策を整理する好機と考えられる。

**内容と考察：** 世界水フォーラムは、世界の水関係者が3年ごとに集う国際会議である。水資源が主要なテーマであるが、産官学民の多様な主体の参加を前提としており、セッションのテーマも多分野にわたる。日本は、2003年3月に第3回を京都・滋賀で開催した。開催国の時には、琵琶湖や淀川はじめ、開催地全体が日本という自然と文化の一種の展示であり、場外企画やエクスカージョンも多数実施された。本事例である第4回世界水フォーラムは、2006年3月にメキシコ国首都のメキシコ・シティで開催された。日本からは300人近い産官学民の参加者があった。「水のエキスポ」は、2006年3月16日（木）～21日（火）にわたり、パビリオンに各国の政府機関や民間団体のブースが設けられ、見学者を迎えた。主に国別に配置された空間の一面で、グラフィックパネル14枚を配置して、展示を行った。言語は英語としたが、パネルをもとに日英スペイン語の3カ国語版の小冊子を作成し、現地のメキシコの関係者を想定して多言語の対応に留意した。水が共通テーマであるが、本事例では、日本の河川について展示する機会であり、「自然再生」パネル展示の目的は、“日本における自然再生に関する技術や事例等を、世界の自然再生や水問題に携わる人達に紹介する”というものであった。

表-1 自然再生パネルの構成と内容の概要

自然再生パネルの構成	内容
1. 日本列島-水満ちる国	アジアモンスーン地域、日本の水田
2. 日本人の川の越し方行く末	自然再生への道 メキシコとの年表の比較
3. 水と暮らす	江戸時代の日本
4. 国を超えて水の知恵を合わせる	琵琶湖疎水の建設、お雇い外国人
5. 水に脅かされた	戦後の荒廃、カスリーン台風
6. 水を制した	ダム建設、河川改修の推進
7. 水を汚した	河川の水質悪化、環境悪化
8. 水をよみがえらせ人を戻した	親水河川
9. 生きものにとっての水を調べる	多自然型川づくり、エコシステムの研究
10. 水の生物も戻ってきた	人と川や水との関わりの見直し
11. 水を分け合う仲間たちを見つめる	日本の水辺と生きもの、人の関係
12. 水を分け合う仲間たちを見つめる	
13. 水のめぐりを取り戻す	流域とのかかわり
14. 地球に生きる人たちと、水の知恵と技術を分かち合いたい	国際協力

展示パネルは、メインタイトル、解説、写真・絵図・地図で構成した。水フォーラムの文脈での河川の展示なので、水の視点から川を説明する方法を取った。タイトルは、技術解説的な表現ではなく、科学展示の話法を取った（表-1）。

企画の要点は以下のとおりである。①現在の自然再生の技術や事業の現在のみを紹介するのではなく、背景を概観。②メキシコでの開催にあわせ、メキシコと日本の対応年表を作成。二国の主な出来事と、河川管理や政策の変遷を示した。③「自然再生への道」というコンセプトから、日本で自然再生が行われるようになった歴史的背景を述べた。近代化の視点、自然と人間の関係性の概念や、技術思想史の観点から整理を行った。④日本の河川の変遷を具体的に表現する写真を精査した。膨大な写真資料を収集したが、解説の文脈上不可欠な内容は、企画制作者自らが撮影したものもあった。リバーフロント整備センターの機関誌 FRONT に掲載されてきた日本各地の水や河川の質の高い写真は、映像アーカイブとして機能した。⑤“自然再生”とは対極にあるような、水質汚染、構造物についても位置づけた。このような河川との歴史を経て、日本人が現在の考え方にいたり、自然再生が行われる時代が訪れたとの論理展開である。⑥自然再生の時代に入り、現地の住民と現地材料を使つての技術支援が行われた。持続可能な社会の構築において、河川の自然と人間の関係性としての自然再生について最後に述べ、国際貢献への現在の到達点とした。

また、展示の実施では、内容をメキシコ在住の日系人や留学生を中心とするスペイン語スタッフに指導し、多言語での対応を可能とした。

本事例で、最も質問が集中したのは、自然再生前史ともいえる、高度成長期の日本の河川のあり方であった。1970年代の「水を汚した」の写真では、先進国といわれる日本がこのように激しい水質汚染やゴミだらけの河川を有していたことへの驚愕がみられた。とかく、技術国家、裕福というイメージの強い日本が、このような過去の反省をもとに、現在の位置にあり、さらに、その反省と教訓を背景に、国際貢献を考えている、という点が共感と呼んだようである。特に、発展途上国は、1960-70年代の日本の状況と同様の社会状況にあり、河川環境も同様である。その対策に苦慮している人々にとっては、日本が数十年にわたり、悪化した河川環境の対策に試行錯誤と努力を続けてきた状況が伝わったようである。世界水フォーラムの出展で得た知見や経験から、今後の日本の河川の管理や技術、環境の変遷を、俯瞰的な視点で系統だった成果にまとめる重要性が認識された。

特に土木技術のような工学は社会との接点の分野である。その海外発信においては、日本の自然特性や、自然認識、技術史、社会状況を丁寧に解説することで、現時点の到達点や関係者の哲学も含めて伝達できると考えられる。その際に、視覚的な情報は重要であるが、写真、絵図、地図のアーカイブは不可欠である。



写真-1 パネル展示状況



写真-2 フィリピン環境大臣への説明



写真-3 メキシコのボランティア・スタッフによる解説

**謝辞：** 本研究は、多くの方々の国際発信への熱意とご尽力に支えられた。資料・写真資料ほか多くの方々のご協力により製作ができた。パネルのデザイン・構成は、(有)ストリームグラフの大崎博之氏らの尽力による。ここに記して感謝申し上げる。